

一、はじめに

先日、一宮市教育委員会博物館建設準備室事務局長の岩野見司先生が来庁され、史料調査委員会の席で、市史編さん事業についての困難さを多々指摘されました。

なかでも、地名の扱いは大変重要であり、多くの史実のすき間を埋めるものとして見のがしはならないことが強調されました。確かに、従来では考えられなかった民俗学的手法により、地名研究が急速な発展をしています。

このような地名研究の動向や地名が悪い方向へ改変される様子については、前々号に詳述しました。その成

地区広報かいぞう

果は、三重県においては、昨年春に相ついで刊行された「三重県の地名」や「三重県地名大辞典」などとなつて世に出ています。上記二書には、前号でとりあげた海蔵村の成立から消滅に至る様子が詳細に述べられています。同様に、西阿倉川・東阿倉川・野田・末永などの各村邑の動きもわかりやすく解説され、最近の町名までも項目としてとりあげられています。

二、末永村の動き

海蔵村の南部の沖積平野に位

置する末永村は、北は海蔵川、南は三滝川に囲まれ、西は野田村、東は浜一色村に隣接した地域でした。現在では、陶栄町・本郷町・京町・滝川町などとなっている地域です。もちろん末永町も入っています。

末永村に關した古い記録は定かではありません。もちろん原始古代には末永村の地名は見あたりません。鎌倉時代に書かれた「神風抄」に、初めて「末永御厨」という地名が出てまいります。しかしながら朝明郡末永御厨となつて

います。末永は、末長とも書いていた

海蔵地区の地名を調べて

四日市市教育委員会社会教育課主幹 森

ようです。「末」というのは、「川(河)口」とか、川が海に注ぐ地を意味しています。「長」は川をさしますから、海蔵川河口に発達した村ということでしょう。

だから、末永の地名の由来は、地形にちなむものと考えていいでしょう。末永・末長と混じて書いたものが、江戸時代になつて末永とおちついたようです。末永村は、江戸時代以後、支配者が目まぐるしく交替しています。文禄年間には、それまでの一柳直盛にかわつて氏家内膳正行広が桑名に居城し、ここ末永村を支配しました。関ヶ原

合戦で桑名城主は本多忠勝となつて元和二年まで本多氏の給地でありました。

しかし、末永村の一部は、四日市代官所の支配地でもありました。この一部は、寛文年間の地図には「橋本町」とされる地域で、のちには「川原町」と称されました。この橋本町を通りぬけ、浜一色村と末永村の境を東海道の往かんが通つていました。今の川原町から京町に至る旧東海道がそれです。

享保十一年には、末永村天領分村高は四四六石、私領(有馬氏領分)二五二石とされていま

三、水に苦しむ末永村

元和年間(十七世紀)に海蔵川が氾濫し、末永村と川原町において二十余軒の家が流失しました。

そこで末永村・川原町では、代官鈴木八右衛門より金四十三両を拝借してその復興事業に努力している。借金を返済したのが享保十三年のことであるが、この年にまたまた海蔵川が氾濫し、復旧成つた地域は洪水により家屋が流失している。

天明年間海蔵川の氾濫は大規模であつたため、流域沿岸十八か村が連署して、堤防補強工

事を奉行所に強く願ひ出ています。

完成するのは十九世紀になつてからであるが、願ひ書に連ねた末永村の庄屋は、天領が忠左衛門及び与左衛門とある。有馬領は、弥左衛門が庄屋として連署している。

この他にも、安政年間など幾たびか洪水に苦しめられ、絶えず海蔵・三滝両河川の改修が行なわれてきた。

四、三重郡中心地に

末永村は、明治になつて浜一色村などと連合して、連合戸長役場などがお

その3

逸 郎

明治二十年の市町村制度の発足により、海蔵村大字末永となつて病院や役場等の建物が設置されました。この年に浜一色村と川原町は末永村と異なり、四日市町へ併合されました。

その四日市町が明治三十年に市制を施行したため、郡役所が末永村内に設けられました。その建物は、現在も太陽化学工場

の東に残っています。こうしてのち七十年ほど、三重郡の政治の中心として末永は発展してきました。

福祉ポスター・習字展

受賞者決まる!

地区社協主催の、小・中学生によるポスター・習字展が実施されました。多数の応募のうちポスターは館増男、習字は羽場仁郎の両先生による厳正なる審

受賞者氏名(敬称略)

■ポスターの部		■習字の部	
(市長賞)	小六 生川 剛	(市長賞)	小五 石崎 充
(社協賞)	中三 山本 康代	(社協賞)	小六 大島 英士
	小六 熊本 智子		小五 松井 英樹
	中三 大川 美幸		中一 山本 真生
(ユニー賞)	中三 内田 亨子	(ユニー賞)	中二 山本 真紀
(百五賞)	中二 岡本 里美	(百五賞)	小五 一海 めぐみ
(北信賞)	小六 大島 英士	(北信賞)	中一 澗 三重
(三銀賞)	小六 堀内 智美	(三銀賞)	小五 金原 伸一
(銀賞)	小六 山本 雅治	(銀賞)	小五 郷原 千津子
	小六 西村 祐香		小六 伊藤 みさ代
	中二 館 祐紀		小六 森田 陽子
	中三 渡部 洋己		中一 金原 絢子
(銅賞)	小五 小山 かおり	(銅賞)	小五 伊藤 佳奈美
	小六 門馬 聡子		小五 小山 かおり
	小六 萩 知子		小五 井田 典子
	小六 宮部 知明		小五 伊藤 知恵
	中一 鈴木 健治		小五 渡部 圭一
	中二 安井 亜樹子		小五 稲垣 敦子
	中三 館 和毅		小六 中島 裕子
	中三 後藤 直美		小六 宮崎 博美

